

事業名	令和5年度魚病診断結果について（病害対策研究）
予算区分	県単
事業実施期間	令和5年度（継続事業）
担当者	住友寿明
共同研究機関等	

<目的>

水産研究課では、魚病の発生やまん延を防止するため、魚病発生の監視や養殖魚の衛生管理の指導を行っている。

ここでは、令和5年4月から令和6年3月の間、当課における魚病診断結果を報告する。なお、魚病診断の対象には、養殖魚以外にも、天然魚、放流用種苗とその親魚、試験研究用の魚及び観賞魚も含まれている。

<魚病診断結果>

淡水魚の魚病診断結果を表1に示した。

淡水魚の診断件数は、アマゴ6件、アユ8件、ウナギ22件の合計36件であった。診断件数は前年度に比べ11件減少した。

アマゴでは、せつそう病が発生したが、冷水病と細菌性鰓病は確認されなかった。

アユでは、診断件数8件のうち3件は、放流前の保菌検査であり、いずれも冷水病原菌等の保菌は確認されなかった。12月に河川で天然のアユがまとまってへい死したが、腐敗が進んでいたため、へい死の原因は特定できなかった。

ウナギでは、診断件数22件のうち、16件はパラコロ病だった。また、ウイルス性血管内皮壊死症が1件確認された。

海水魚の魚病診断結果を表2に示した。

海水魚の診断件数は、サツキマス3件、フェダイ1件、ブリ4件、マアジ1件、マダイ3件の合計12件であった。診断件数は前年度に比べ2件増加した。

サツキマスでは、海面養殖に向け海水馴致中のものがまとまってへい死したが、へい死の原因は不明であった。

フェダイでは、飼育試験用の魚がへい死したが、へい死の原因は不明であった。

ブリでは、黄疸症状を示した天然魚が確認された。検査の結果、細菌性黄疸症ではなかったため、生理障害によるものと考えられた。

マアジでは、釣り餌用の魚を畜養した際にへい死した事例があった。輸送時の外傷や低塩分が原因でへい死したと考えられた。

マダイでは、夏季に釣り堀用の魚が白点病でへい死した事例があった。この魚は、循環式の水槽で飼育されていたため、水槽内で白点虫が増殖して多数が寄生し、重篤な症状になってへい死したと考えられた。

表1 淡水魚の魚病診断結果

魚種名	魚病名	魚病診断件数												計	
		R5	5	6	7	8	9	10	11	12	R6	2	3		
アマゴ	せっそう病	4		1	1						1				3
	不明					1							2		3
	小計	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	2		6
アユ	冷水病				2										2
	不明						1			1		1			3
	保菌検査	2	1												3
小計	2	1	0	2	0	1	0	0	1	0	1	0		8	
ウナギ	ウイルス性 血管内皮壊死症									1					1
	カラムナリス病					1									1
	パラコロ病	2	2	2	2		1	2	1			1	3		16
	鱒赤病						1								1
	不明								1		1	1			3
	小計	2	2	2	2	1	2	2	3	0	1	2	3		22
合計	4	3	3	5	2	3	2	3	2	1	3	5		36	

表2 海水魚の魚病診断結果

魚種名	魚病名	魚病診断件数												計	
		R5	5	6	7	8	9	10	11	12	R6	2	3		
サツキマス	不明									1	1	1			3
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0		3
フェダイ	不明	1													1
	小計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		1
ブリ	黄疸症												1		1
	不明			2											2
	保菌検査								1						1
小計	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4	
マアジ	不明							1							1
	小計	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0		1
マダイ	白点病					1									1
	不明					1					1				2
	小計	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0		3
合計	1	0	2	0	2	0	1	1	1	2	1	1		12	